

Title	福田徳三著 改定経済学研究
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.5 (1915. 5) ,p.593(117)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150501-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を増すのみにして、穀價の下落を來すものに非ずと説くものなり。リ氏にありては地主階級あるが爲に、地代騰貴するに非ずして、穀價騰貴てふ自然の大則の結果に歸するものなり。要するにリカルドの主張の存する所は、地代は價格騰貴の結果、發生したるものにして、生産費中に計上せらるゝ事無く、賃銀、利潤を控除したる殘額なり、余剰なりと論結するものなり。

第五節 地代と農業の改良進歩

リ氏は決して農業の改良進歩が、生産力増進に及ぼす効果を輕視するものに非ず。否資本の重要な職分は、無限の人口、有限の土地の調和劑たる作用にありとなし、資本の充用は農業技術の改良進歩を促進せしめ、少量の勞量を以て多額の農産物を生産し、價格を低下して消費者全般に利益するものなりと。即ち、土地生産力増大する時は、穀價下落し、劣等地耕作の廢止となるものなり。從而地代下降し、利潤上昇し以て資本の蓄積を増ならしむるものなりと(「原論」四一、四二頁)

然れども彼は土地改良進歩の効果を無制限に

樂觀するものに非ずして土地收穫遞減の法則を一時停止するに止まるものなりとせり。即ち農業技術の改良進歩により惹起せられたる利潤の上昇、資本の蓄積は、勞働に對する需要を増加し、茲に人口増殖を見るものなる故、遂に再び穀價の騰貴となる。地代は一時下降して地主は不利益を蒙ることあるも、結局する所、却て人口増殖により穀物に對する需要を擴大するものなり。他面に於て技術上の改良、發明等は一層劣等なる土地の耕作を可能ならしめ、地代騰貴の勢を再現するものなりと(「原論」四三頁註、「影響」三七七頁註)

要するに、生産力の増進はリカルド分配論の全體より見て、一時的第二次的地位を有するに過ぎずして、常に生産力の遞減を前程とするものなり。此觀念は、賃銀、利潤を論ずるに當りて、特に著しく現はれ、勞働の生産力と賃銀、利潤とは全然没交渉なるかの如き觀を呈するに至れり。如斯前提は經濟界實際の事實に反する事大にして、從て之れより演繹せられたる彼の分配論の大部は空論たるに終れり。(未完)

批評と紹介

福田徳三著 『定經濟學研究』

大正四年三月東京同文館發行
菊版乾坤二卷一八二頁定價五圓

本書は著者福田博士が去る明治四十年中に上梓せられたる「經濟學研究」を改訂増補して更に此回刊行せられたるものなり。載する所は博士が過去十數年間に於て試みし研究討究の成果にして、其研究問題には經濟單位發展史論あり、商業道徳觀あり、フアドルガ(組合)論あり、アグラワイウム論あり、マイヌ論あり、コレギア論あり、丁稚論あり、カルタル、テオリー論あり、ユストム、ブレチウム論あり、企業心理論あり、工場法案觀あり、シムナカリズム論あり、マルサス論あるの外數十篇を數へ、殆んど經濟學の全 *Savant* に互れるの觀あり。從つて本書は終始一貫せる著述には非ざれども、著者は此數十篇の論文を系統的に分類編纂して前後六篇とし、其中三篇は之を乾卷に收め、他の三篇を坤卷に分載せり。乾卷の三篇は題して「經濟單位發展史研究」「經濟史雜考」並に「根本概念雜篇」とし、坤卷に收めたる三篇を「基督敎經濟學研究」「企業勞働及社會問題」及び「マル

ナス及びリカルド研究」と名命せり。

本書の前身たる「經濟學研究」は既に洛陽の紙價を高めたる名著にして、其眞價に就きては吾人の喟々を要せざる所なり。されど、此前身に親むの機會を得ざりし讀者に對して吾人は本書が——未成未熟の書なりとの著者の遜讓的序言ありとは云へ——内外の經濟學者の筆に成る此種の著述中に於て最 *Scholarly*なるもの、一に數ふ可く、又本邦人の手に成る同種の書物中に於ては最も *judice*なるものたることを告げんと欲す。博士の博識學殖ありて始めて斯くの如き *magnum opus* を完成することを得るなり。幾百幾千の讀者中には或は著者の觀察、斷定に對して異議を狭むものなすと云ふ可からざる可きも、幾分にも經濟學的感受性を有する者にして、本書の精讀に依りて刺戟を受けざる者はあらざるならん。然も本書は既に世に定評あり、吾人の紹介の如きは畢竟蛇足たるのみ。

古仁所豐著 『最近獨逸產業の發達』

大正四年三月大倉書店發行
菊版二七七頁定價一圓廿錢

獨逸帝國が昨年八月歐洲の列強を敵手として宣戰を布告せしより既に九月、此間其の完備せる交通機關を妙用して朝に四を伐ち夕に東を討ち、未だ敵をして殆んど一步も國內に侵入する機會を與へざるは其陸軍の組織訓練の優秀なるの事實に觀由せずんば非ざるなり。由來獨逸が陸軍の精銳を以て知らるゝ